

平成30年度「つながる食育推進事業」成果報告書

受託者名	山口県教育委員会		
モデル校名称	下松市立下松小学校	下松市立公集小学校	下松市立花岡小学校
対象学年及び人数	全学年（722人）	全学年（764人）	全学年（832人）
栄養教諭等の配置	下記の年より、栄養教諭が各校1名配置		
	平成22年	平成27年	平成26年

1 取組テーマ

<p>食育プロジェクトK ～健康で快適な食生活・食文化の継承を図る地域の力～</p>
--

コミュニティ・スクール設置率100%である本県の特徴を生かし、学校運営協議会の部会等において、食について語り合う熟議を行うことで、それぞれの取組を関連付け、食育の効果を高める。

平成28年9月に新設の下松市立小学校給食センターの受配校のうち、栄養教諭配置のある3校をモデル校とし、栄養教諭が中核となって教職員や関係機関等と連携しながら、特色ある食育を推進する。健康な食生活、快適な食生活、食文化の継承を大切にしていきたい下松市ということで、健康のK、快適のK、継承のK、そして下松市のKの頭文字をとって、食育プロジェクトKとした。

通年で行う食に関する指導に加え、体験活動や食育講演会などを交えて、朝食摂取率向上・内容の充実、食事マナーの定着、地場産食材・郷土料理への理解、保護者や教職員の食に対する意識向上などをめざす。

2 推進委員会の構成

【山口県つながる食育推進委員会】

委員長	森永 八江	山口大学教育学部	准教授
委員	牧中 マリコ	山口県PTA連合会	副会長
委員	家根内 清美	山口県食生活改善推進協議会	会長
委員	藤本 哲城	下松市立下松小学校	校長
委員	岡田 典子	下松市立下松小学校	栄養教諭
委員	世木 志保	下松市立公集小学校	養護教諭
委員	徳永 淳一	下松市教育委員会	指導主事
委員	小林 桂子	下松市教育委員会 事務局	主査
委員	岡田 威一郎	山口県健康福祉部健康増進課	主幹
委員	鍛治原 寛	山口県農林水産部ぶちうまやまぐち推進課	主査
委員	原 井 進	山口県教育庁学校安全・体育課	課長
委員	山本 時弘	山口県教育庁学校安全・体育課	教育調整監
委員	中嶋 浩子	山口県教育庁学校安全・体育課	指導主事
委員	船木 隆司	山口県教育庁学校安全・体育課	指導主事

【下松市つながる食育推進委員会】

委員長	藤本 哲城	モデル校校長代表	下松市立下松小学校
委員	川野 素裕	モデル校教務主任代表	下松市立花岡小学校
委員	熊崎 陽子	モデル校給食主任代表	下松市立下松小学校
委員	岡田 典子	モデル校栄養教諭代表	下松市立下松小学校
委員	世木 志保	モデル校養護教諭代表	下松市立公集小学校
委員	中道 純子	栄養教諭未配置校養護教諭代表	下松市立久保小学校
委員	高谷 憲和	モデル校 P T A 代表	下松市立下松小学校
委員	石生 洋子	健康増進課 専門員	下松市役所
委員	池田 千帆	学校給食課 課長	下松市役所
委員	徳永 淳一	学校教育課 指導主事	下松市教育委員会
委員	小林 桂子	学校教育課事務局 主査	下松市教育委員会

3 連携機関及び連携内容

連携機関名	連携内容
下松市子どもの食育推進ネットワーク委員会（健康増進課）	<ul style="list-style-type: none"> 子ども料理教室の開催 各家庭への啓発活動 「わが家の野菜レシピ」募集
下松市学校保健会（学校教育課）	<ul style="list-style-type: none"> 食育講演会の開催（けんこう教室）
下松市教職員研修会食育部会	<ul style="list-style-type: none"> 「系統的な食育の推進」の作成 「食事マナーの定着」指導案作成 学級掲示資料の作成
下松市食生活改善推進協議会	<ul style="list-style-type: none"> 親子料理教室における調理の指導助言 食事マナーの指導
下松市地産地消推進協議会（学校給食課）	<ul style="list-style-type: none"> 地場産物を使用した給食 「まるごと！くだまつ給食」の実施 生産者との交流・出前授業
Kビジョン株式会社（ケーブルテレビ局）	<ul style="list-style-type: none"> モデル校の取組の紹介

4 取組前のモデル校の状況

【下松市立下松小学校】

○これまでの食育の取組

平成22年から栄養教諭が配置されており、食に関する指導の全体計画に基づいて、栄養教諭が学級担任と連携して、学級活動や社会科、給食時間等において食に関する指導を行ってきた。また、生活リズムカードを活用し、学校と家庭とで児童が生活習慣の改善を図るよう取り組んできた。

○学校の課題

栄養教諭が中心となって食に関する指導を行っているが、教職員の「食育」への意識を高めるために、学校全体で取り組むための体制を充実させていく必要がある。また、朝食に野菜を食べる児童の割合が低いことや食事マナーを意識して食器を持って食事をしている児童の割合が低いことなどが課題である。

【下松市立公集小学校】

○これまでの食育の取組

平成27年から栄養教諭が配置されており、給食時間はもとより授業の中でも学年ごとに題材を決めて栄養教諭が学級担任と連携して食に関する指導を行ってきた。また、給食委員会の活動を通して児童の食に関する意識を高めたり、給食試食会や学校保健安全委員会等において栄養教諭が保護者に向けた講話を行ったりしてきた。

○学校の課題

近年都市化が進み、環境が大きく変容している中、学校教育に対する支持的な層と無関心層の差が広がりつつある。児童には、朝食の内容が十分でないことや偏食が見られること、規則的な排便の習慣や食事マナーが身に付いていない等の課題がみられる。

【下松市立花岡小学校】

○これまでの食育の取組

平成26年から栄養教諭が配置されており、長期休業中に生活リズムカードを活用したり、6年生を対象に年2回の弁当を作る日を設定したりすることで、児童の食の自立や家庭での食習慣の改善をめざした取組を行ってきた。また、地域の生産者等と連携した地場産食材についての指導にも力を入れてきた。

○学校の課題

朝食の内容が主食のみの児童が多く、栄養バランスを考えた食事を意識させる必要がある。また、食事をとる時の姿勢や箸の持ち方等を意識させ、食事マナーの定着を図る必要がある。

5 評価指標の設定について

(1) 共通指標について

- ① 児童生徒、保護者の食育に関する意識に関すること
 - ア 朝食を食べることへの価値
 - イ 共食をすることへの価値
 - ウ 栄養バランスを考えた食事をとることへの価値
 - エ 食事マナーを身に付けることへの価値
 - オ 伝統的な食文化や行事食を学ぶことへの価値
 - カ 衛生管理の重要性について学ぶことへの価値
- ② 朝食を欠食する児童生徒の割合
- ③ 児童生徒の共食の回数
- ④ 栄養バランスを考えた食事をとっている児童生徒の割合
- ※ 共通指標は、児童生徒アンケートによって測定する。

(2) 独自指標について

- ⑤ 食事マナーに気を付けて食事をしている児童の割合
 - ⑥ 郷土料理を知っている児童の割合
 - ⑦ 食育の重要性を理解している教職員の割合
- <測定方法>
- ⑤ 山口県学校栄養士会が毎年行っている5年児童対象アンケートによって測定する。
 - ⑥ 山口県学校栄養士会が毎年行っている5年児童対象アンケートによって測定する。
 - ⑦ 教職員対象のアンケートによって測定する。

6 実践内容（評価指標を向上させるための仮説（筋道）を含めて）

教職員、保護者、食生活改善推進協議会等、子どもの成長に関わる全ての人や組織が、子どもの食に関わる課題を共有し、解決に向けて様々な取組に主体的に参画することで、子どもの食に対する意識が高まり、健康で快適な食生活を送ろうとする実践意欲や地域の食文化を大切にしようとする心が育まれると考えて次のような取組を実践した。

<学校、家庭、地域、関係機関の連携を深める実践>

○わが家の野菜レシピ集作成

下松市子どもの食育推進ネットワーク委員会の主催で市内の幼児・小学5年生・中学1年生を対象に、家族でつくる「わが家の野菜レシピ」を募集した。応募作品の中から10品選考し、レシピを冊子にまとめた。作成した冊子は市内の幼児から中学生までの子どもをもつ各家庭に配付した。10月には市内の小中学校の美術展・科学展開催にあわせて、「わが家の野菜レシピ」の展示を行った。



○つながる食育啓発資料作成

下松市子どもの食育推進ネットワーク委員会が作成したキャッチフレーズの認知度を上げることで朝食摂取率の向上と食事内容の充実をめざし、啓発資料を印刷したクリアファイルを市内の全児童生徒に配付した。学校と家庭をつなげる連絡袋としても活用してもらうために、中には「つながる食育通信」を入れて配付した。「つながる食育通信」には、事業前アンケート調査の結果から見てきた課題に対して望ましい食習慣を定着させるためのアドバイスやワーキンググループが市内の生産地を見学して紹介した「つながる食育産地レポート」などを掲載し、家庭で食に関する話題が膨らむように工夫した。



○食生活改善推進員による給食サポート

下松市食生活改善推進員が児童と一緒に給食を食べながら、食事の重要性や食事の喜び、楽しさなどを伝え、食器の置き方や持ち方、食べる姿勢などの指導を行った。給食終了後に担任に指導のポイントや気づき等を伝え、日々の指導に生かすことができるよう助言を行った。



○給食試食会

公集小学校において給食試食会を行った。主に1年生の保護者を対象とし、給食の内容及び成長期の望ましい食習慣について栄養教諭が講話を行った。その後、給食を児童と一緒に食べる中で、実際の給食の量や食べる時の姿勢、正しい箸の持ち方などを確認し、家庭での実践を促した。



○親子料理教室

栄養教諭や校内のコミュニティスクール担当者が調整を行い、指導者に下松市食生活改善推進員を招いて親子料理教室を開催した。どのモデル校でも20組程度の親子が参加し、朝食に適している山口県の郷土料理や学校給食のおすすめ料理の調理にチャレンジした。



○親子リレー読書

花岡小学校では、6年生の各学級で「いのちをいただく」（内田美智子著）を家庭に持ち帰って読み、感想を添えて次の児童に回すという取組を実施した。半年以上かけて全6年生が読み終えた。

<栄養教諭を中核とした全校体制の充実に向けた実践>

○食に関する指導研修会

栄養教諭・学校栄養職員を対象にした食育の研修会を開催し、栄養教諭・学校栄養職員の資質向上を図った。また、各学校の管理職やその他の教諭等にも参加を促し、子どもたちが抱える食に関する課題の解決に向けた協議等を通して食育の推進体制の強化・充実を図った。



○食事マナーの定着に向けた指導

市内各小・中学校の全学級において、月1回の「食事マナーの日」や日々の給食時間に、下松市教職員研修会食育部会で作成した資料（指導案、掲示物）を活用して児童生徒の実態に応じた食事マナーの指導を行った。指導は学級担任が中心となって行った。

○公開授業「Happy朝食を考えよう」

公集小学校では、平成29年度食育指導者養成研修を受講した教諭が主導で食育の授業を計画し、栄養教諭が支援するTTで学級活動の授業を行うなど、学級担任が主体となる食に関する指導の授業を展開した。中国地区小学校特別活動研究大会において授業提供を行うなど広く授業を公開し、協議することによって、栄養教諭の授業への関わり方を研究した。



○保健指導「朝の目覚ましスイッチ」

身体測定時にあわせて、養護教諭による保健指導を行った。栄養教諭と協議しながら内容を決め、栄養バランスのよい朝食を摂取することの重要性や朝食を毎日とるために気を付けるポイントについて全校児童に伝えた。また、指導した内容を保健だよりにまとめ、各家庭に配付することで家庭へのつながりを図った。



○あと一口運動

下松小学校の既存の研究組織の一つである「体力向上プロジェクト」の取組で、給食の残量を減らすことをめざし、全教職員間で指導方法を熟議し、共通の認識をもって実施した。

偏食傾向のある児童や少食の児童は教員と相談して食べる量を決め、残さず食べることができるよう支援した。低学年においては、残さず食べたなら色塗りをする「ペロリンカード」を活用した。給食委員会が残量調査をし、完食したクラスを校内放送で表彰した。

○学校保健安全委員会での取組

学校保健安全委員会を活用し、保護者や地域の方を交えた取組とすることで、児童の抱える食に関する課題やその解決に向けた取組を広く共有することに努めた。

花岡小学校では、年に2回の学校保健安全委員会を開催しており、1回目（6月）は、給食指導のようすを保護者に対して説明した後、給食参観を行った。その後、参加した保護者が小グループに分かれて「食」についての情報交換会を行い、日ごろの悩みやそれに対するアドバイスなどを互いに出し合った。2回目（12月）は、参加した保護者や地域関係者が給食当番の仕事（運搬・配膳）を体験し、給食を試食した後、給食センターの業務について下松市教育委員会学校給食課の説明を受けた。また、給食委員会の児童による発表を通して学校での取組を周知した。



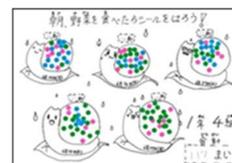
<その他の食に関する意識を高める実践>

○生活リズムカードの実践

下松市内の全小学校において、長期休業中に児童の生活習慣を保護者と一緒に確認するための生活リズムカードに取り組んだ。ネーミングは各学校で特徴を出しながらも「朝ご飯に野菜を食べているか」という共通項目を設けるなど朝食摂取状況を向上させるための工夫を取り入れた。カードに保護者の記入欄を設けることで各家庭における意識の向上を図った。

○朝、野菜を食べたらシールをはろう

下松小学校では、生活リズムカード「スッキリ・ぐんぐん・チャレンジカード」を実施した翌々週に、各クラスで朝食に野菜を食べた児童の調査を行った。方法は、クラスごとにシール台紙とシールを用意し、朝食に野菜を食べた児童が自分でシールを台紙に貼った。それを給食委員が集計し、放送で状況を報告した。



○弁当の日

花岡小学校では、6年生が11月と1月に自分が食べる弁当を作る取組を行った。

11月には、校長が朝の読書時間に6年生の各クラスをまわり「弁当の日がやってきた！！」（竹下和男著）の読み聞かせを行うことで弁当作りの意味を伝え、栄養教諭が家庭科の時間を使い、弁当作りの学習を通して、食事を作ることや食べることの意義や価値を考えさせた。当日は朝のうちに互いの弁当を見合い、給食時には体育館に集まって弁当作りの話をしながらみんなで食べた。

翌日は、「弁当の日」の提唱者である竹下和男氏を招聘して、5、6年生、保護者、地域の方を対象にした講話を行った。

「ヒトは食事を通して人になっていく」というテーマで、食べるだけでなく食事を作ることの重要性を学んだ。

1月には、5年生を交えて一緒に昼食を食べた。5年生は給食を食べたが、6年生の姿を見ることで翌年に向けた意欲を高めた。



○給食指導「山口県の郷土料理」

山口県の代表的な郷土料理である「けんちょう」を給食で食べているときに、栄養教諭が教室へ行き、なぜ給食に「けんちょう」が出るのか、郷土料理とは何か、山口県の郷土料理にはどのような料理があるか、どのような材料が使われているかなどについて話をした。

○生産者講話

下松小学校では、笠戸島のレモン生産者を招聘して、3年生児童に対して講話を行った。地場産食材や生産者への理解を深め下松を愛する心の育成を図った。



○食育講演会

前述の花岡小学校での講演会に加えて合計3つの食育講演会を開催した。

下松市学校保健会の行事である「けんこう教室」の中で、食と環境教育アドバイザーである中尾卓嗣氏を招聘して、「食でつなげる人・未来～心身の健やかな成長のために～」と題した講演会を行った。市内の中学生とその保護者を対象として実施した。



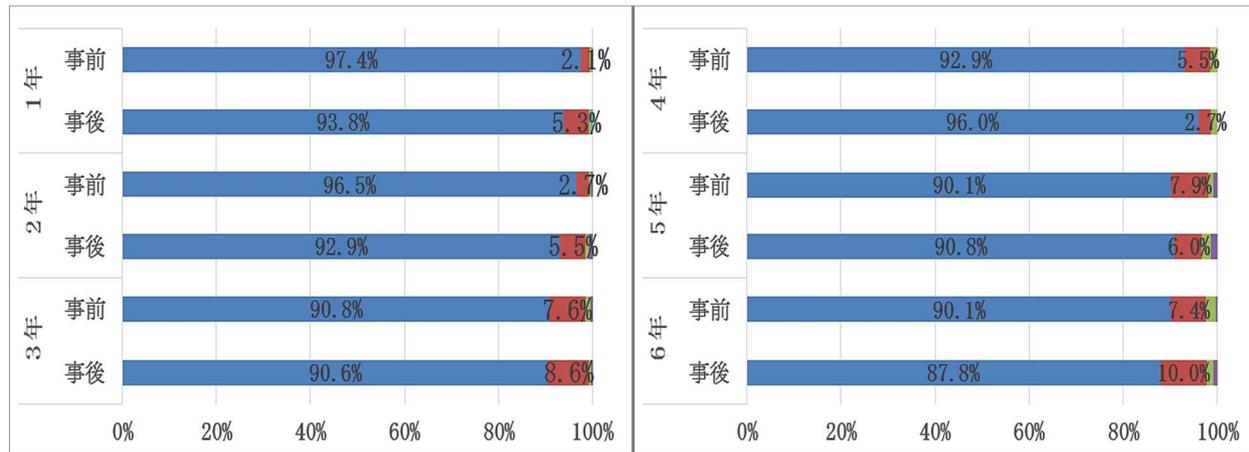
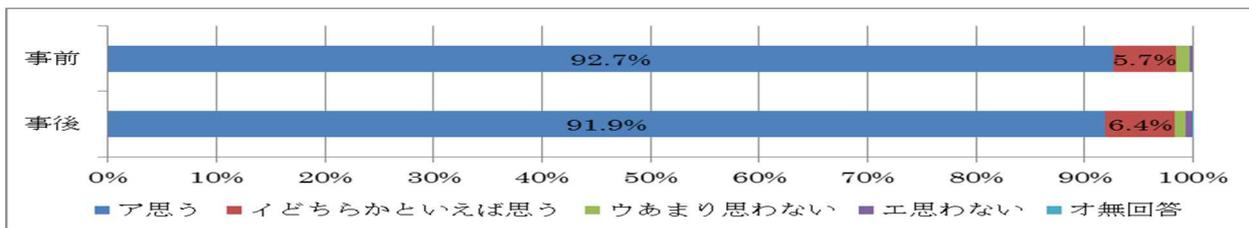
公集小学校では、学校保健安全委員会の開催に合わせて山口大学名誉教授である山田次郎先生を招聘して、「食事は愛のハーモニー」と題した食育講演会を行った。5、6年生の児童と保護者を対象に「食べる」、「バランスよく食べる」、「食事」の意味について話していただいた。



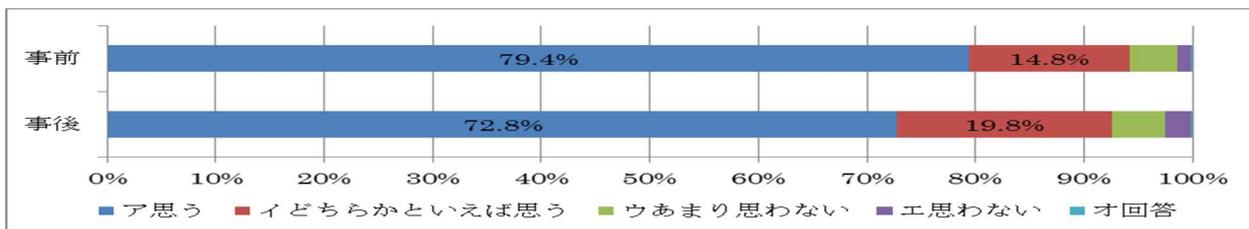
7 評価指標の測定結果

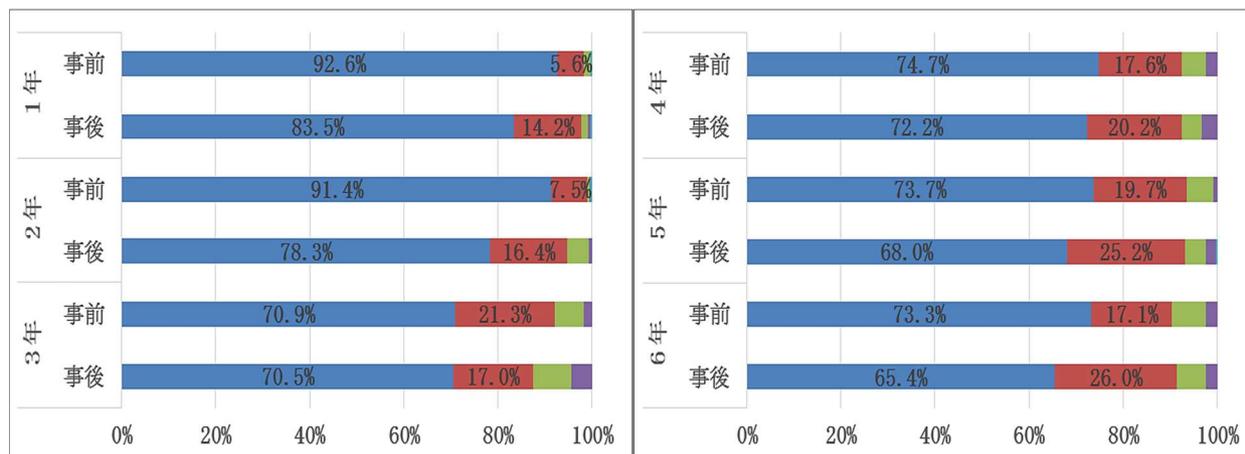
(1) 共通指標について

【設問1-①】朝ごはんを食べることは大切だと思いますか。

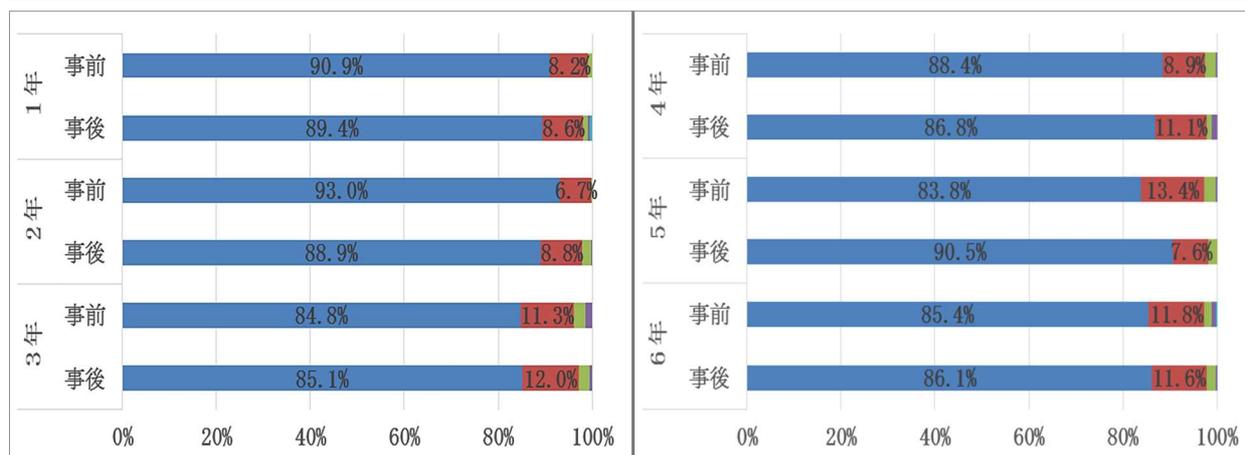
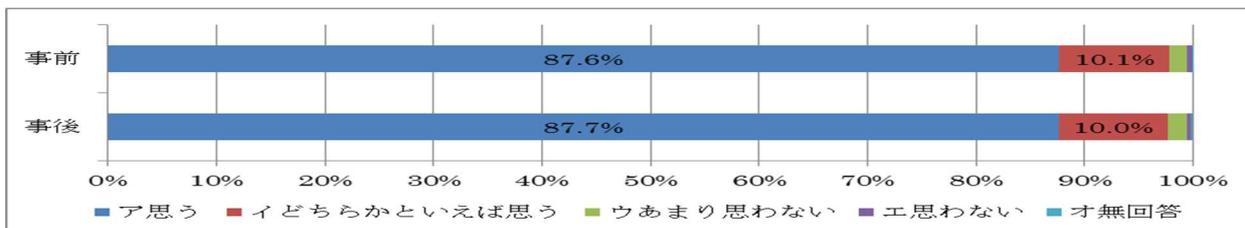


【設問1-②】家族などと一緒に食事をとることは大切だと思いますか。

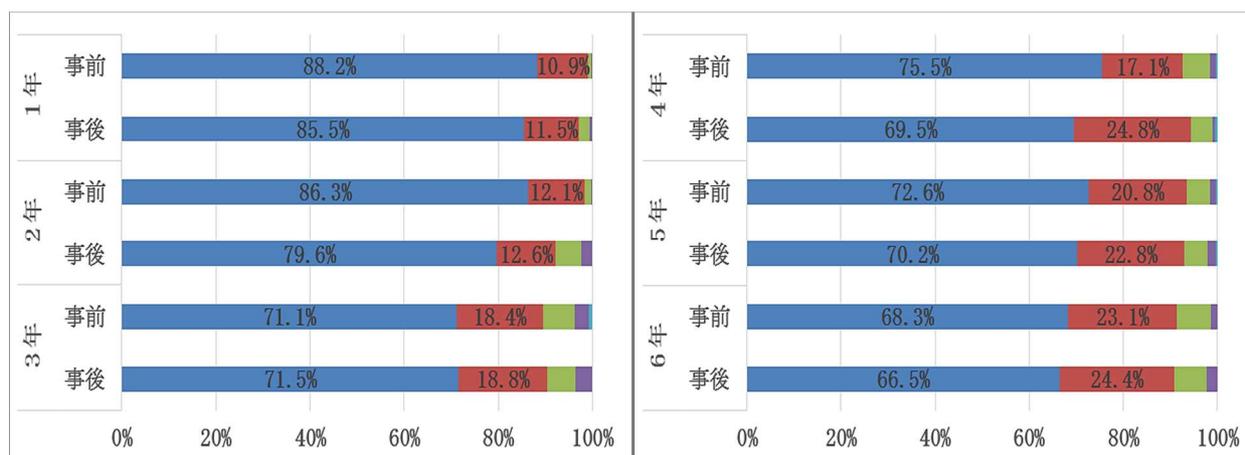
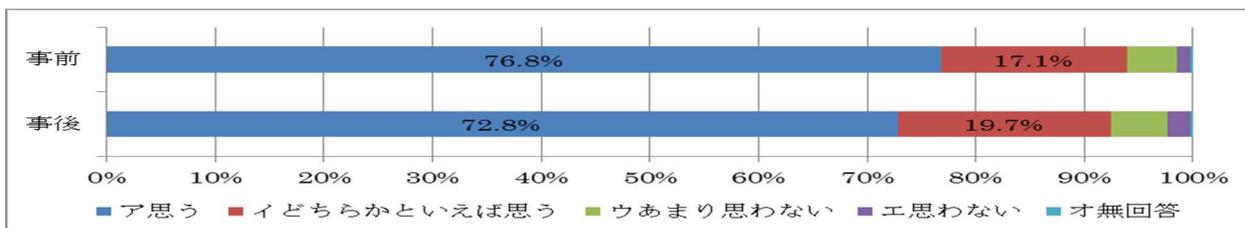




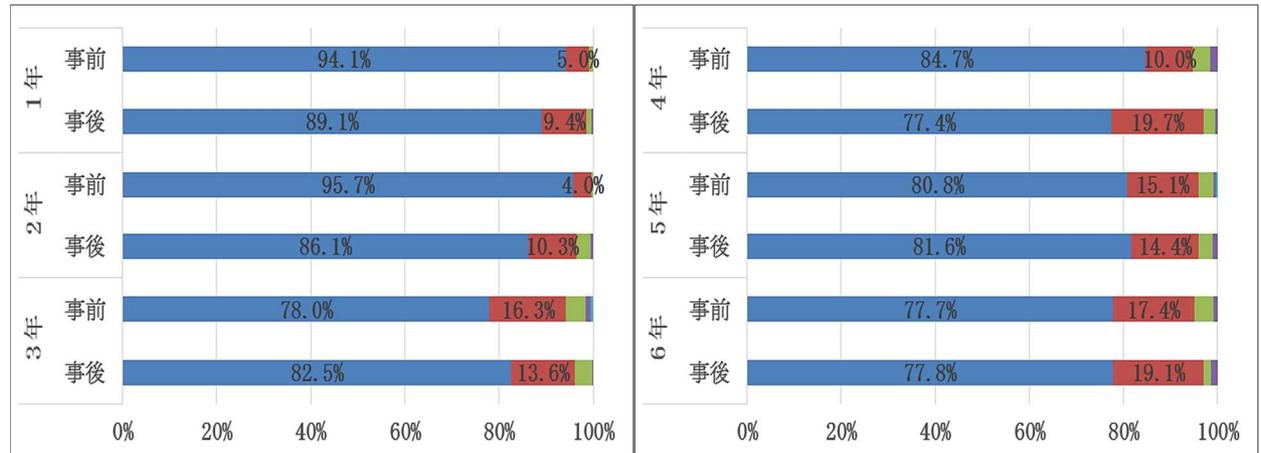
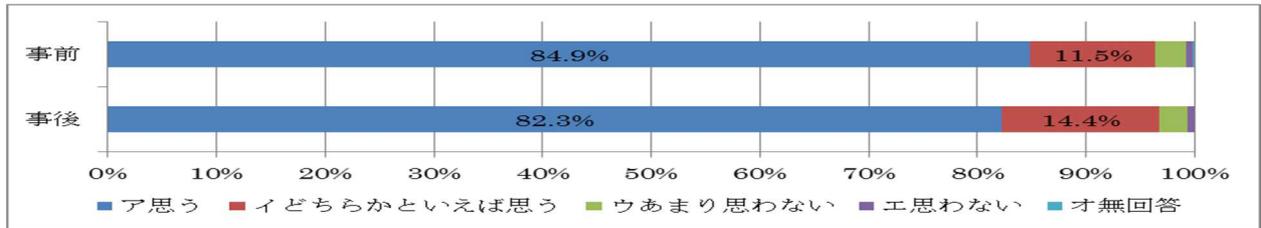
【設問1-③】 栄養バランスを考えた食事をとることは大切だと思いますか。



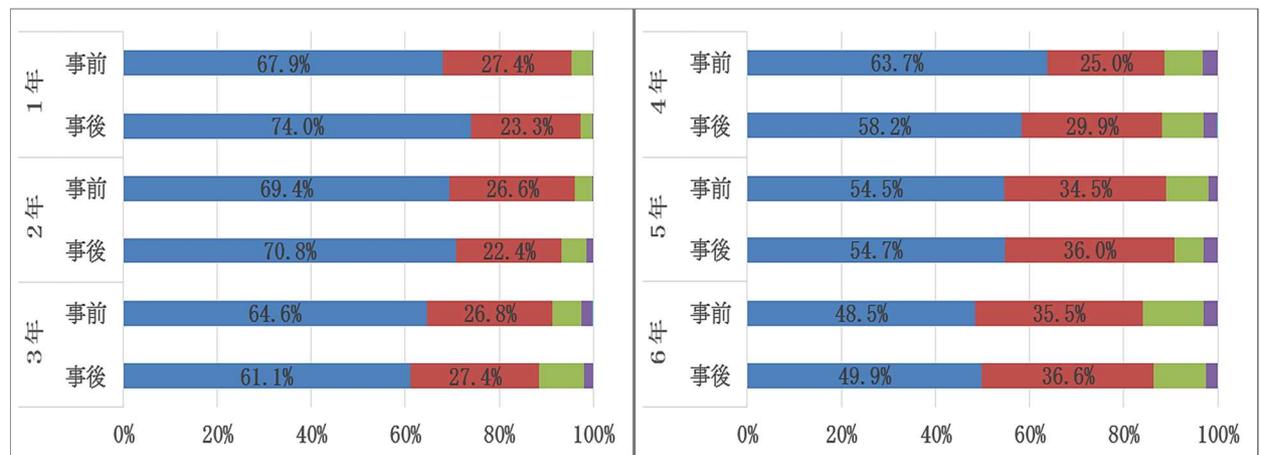
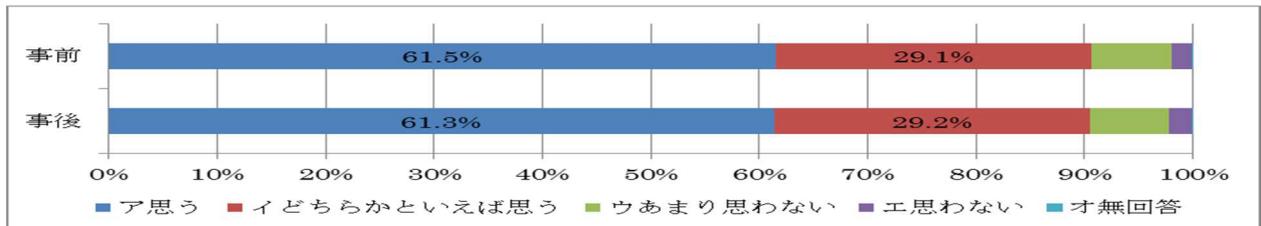
【設問1-④】 ゆっくりよくかんで食べることは大切だと思いますか。



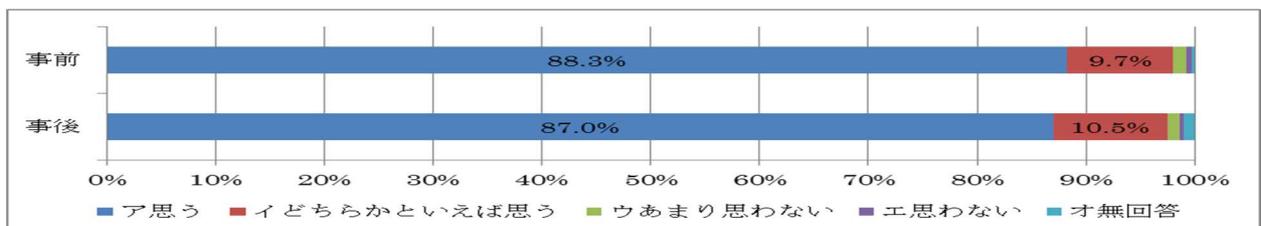
【設問 1-⑤】 食事マナーを身につけることは大切だと思いますか。

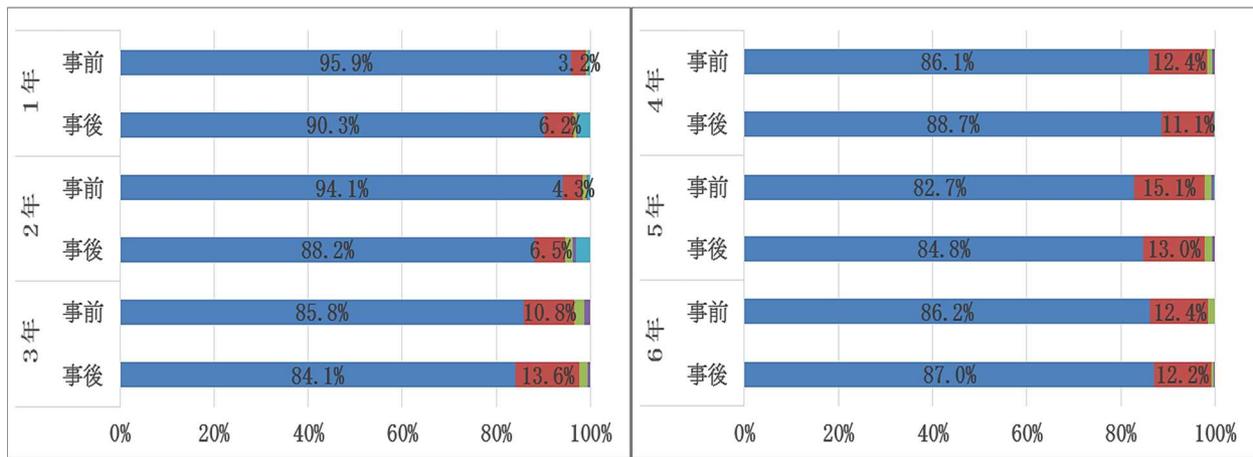


【設問 1-⑥】 伝統的な食文化や行事食を学ぶことは大切だと思いますか。

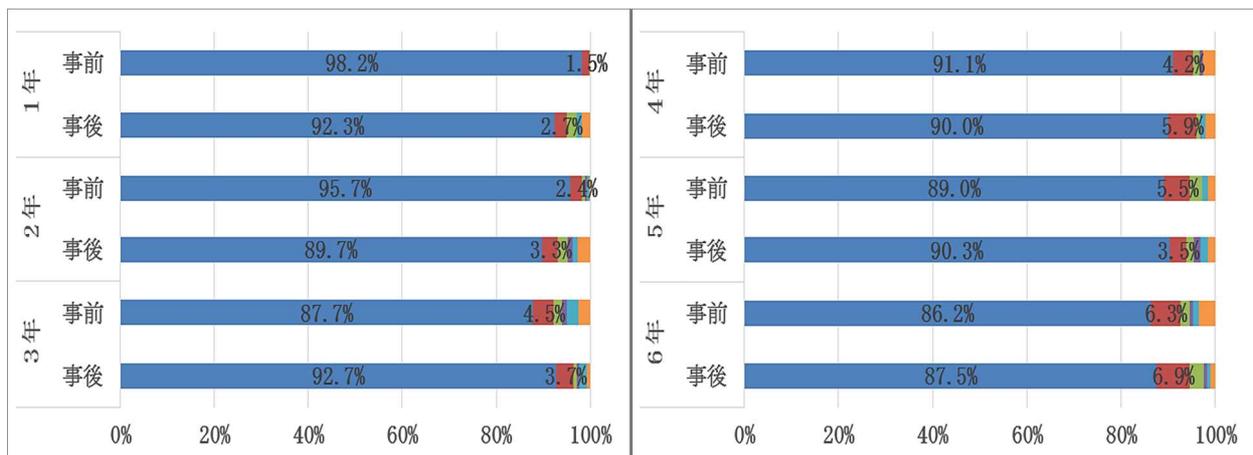
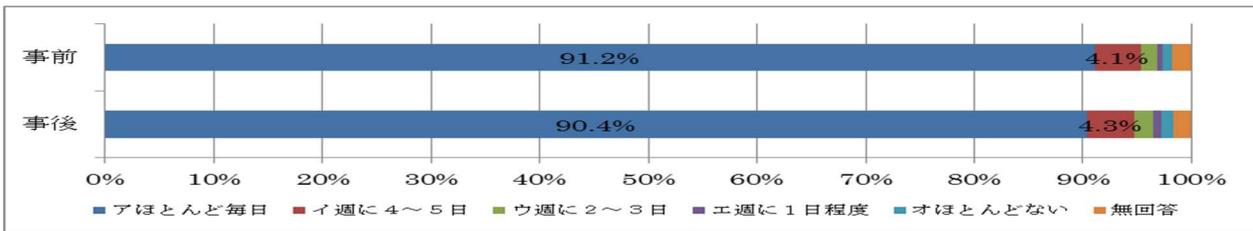


【設問 1-⑦】 食事（給食）の際に衛生的な行動をとることは大切だと思いますか。

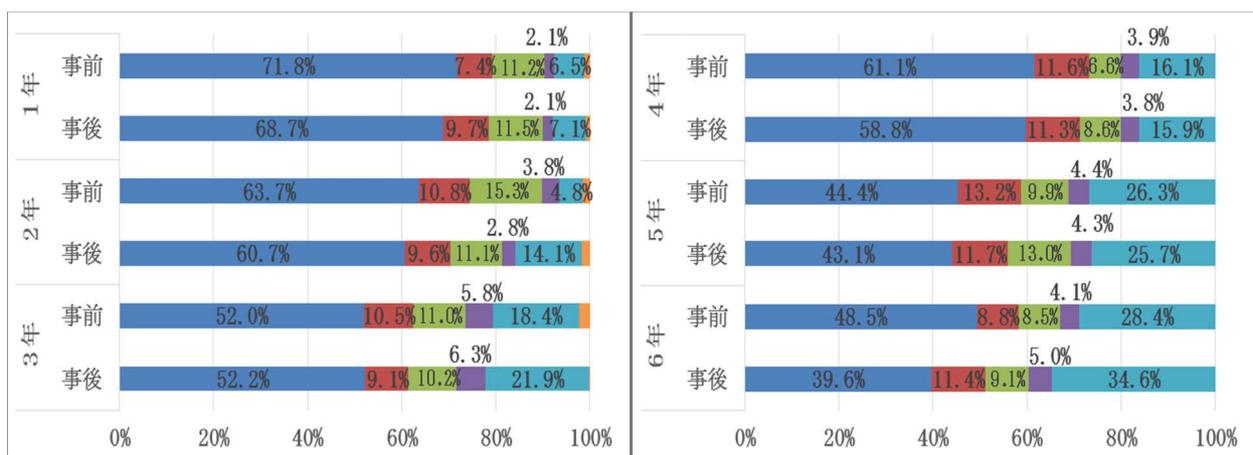
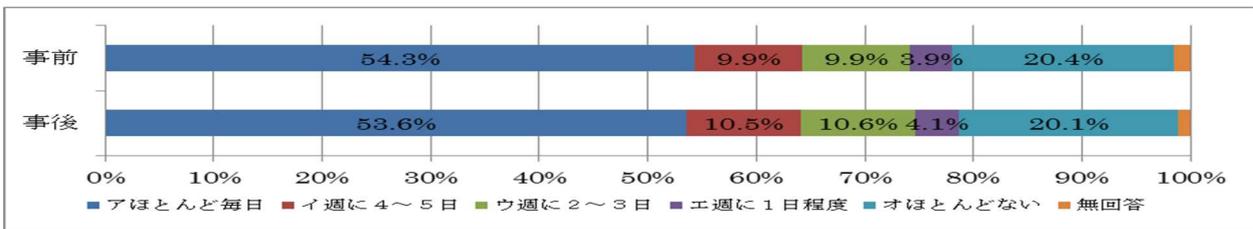




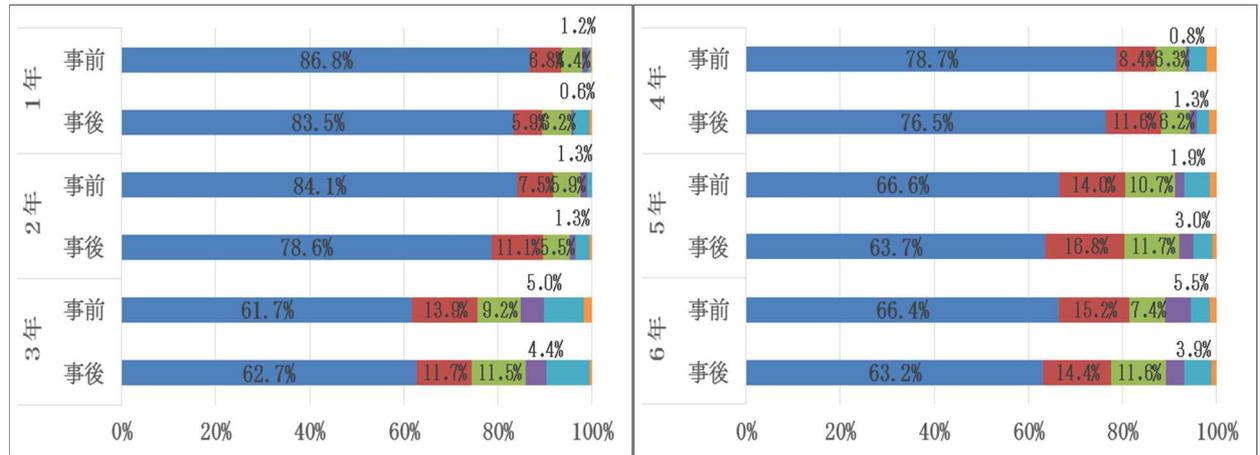
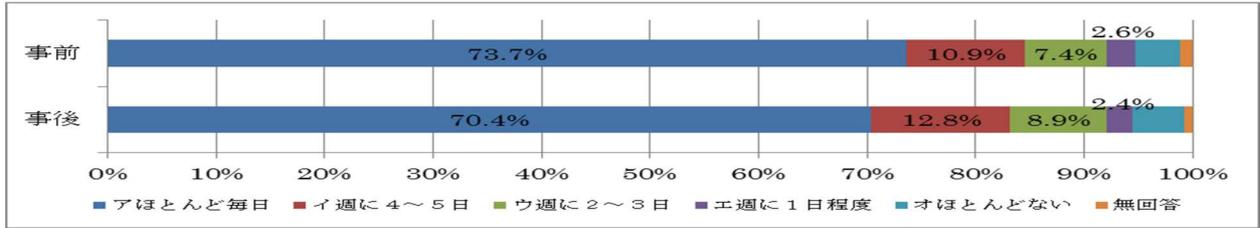
【設問2】朝食を毎日食べていますか。



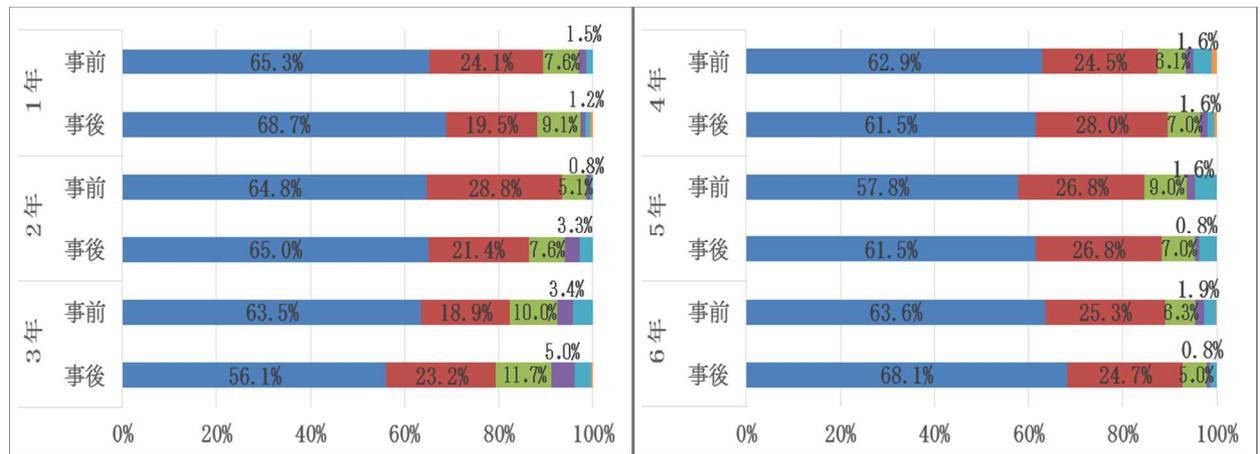
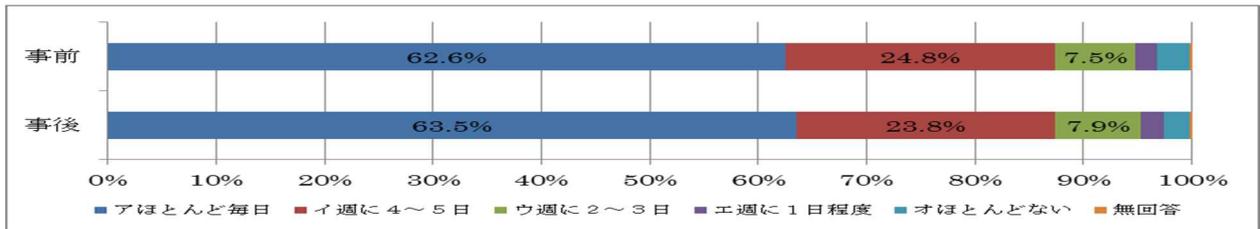
【設問3】朝食を家族と一緒に食べることはどのくらいありますか。



【設問4】夕食を家族と一緒に食べることはどのくらいありますか。

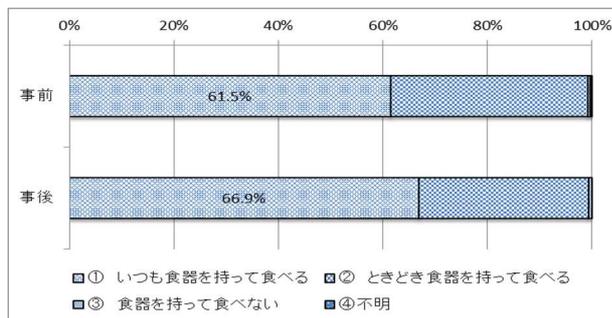


【設問5】主食、主菜、副菜を3つそろえて食べる事が1日に2回以上ある（学校給食も1回に数えます。）のは、週に何日ありますか。

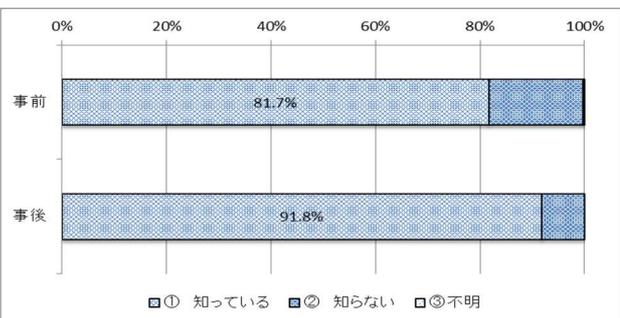


(2) 独自指標について

○あなたは食器をもって給食を食べていますか。

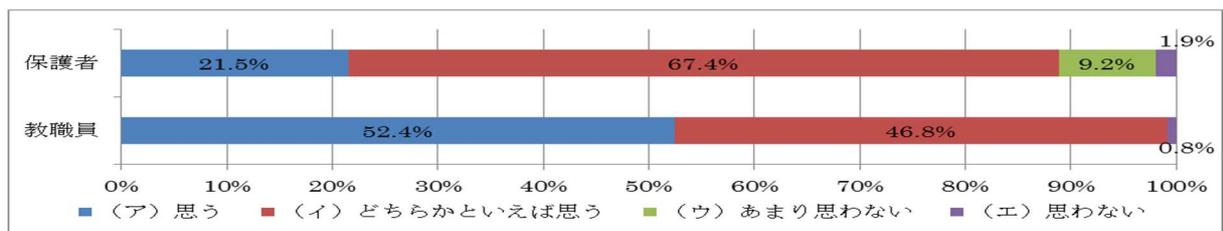


○あなたの住んでいる地域や山口県の郷土料理を知っていますか。

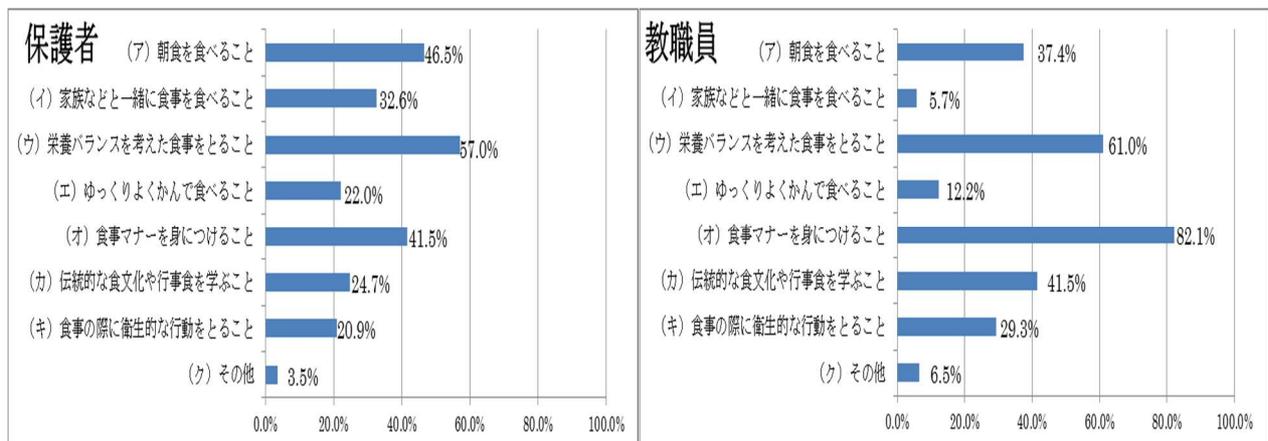


○保護者・教職員アンケートより

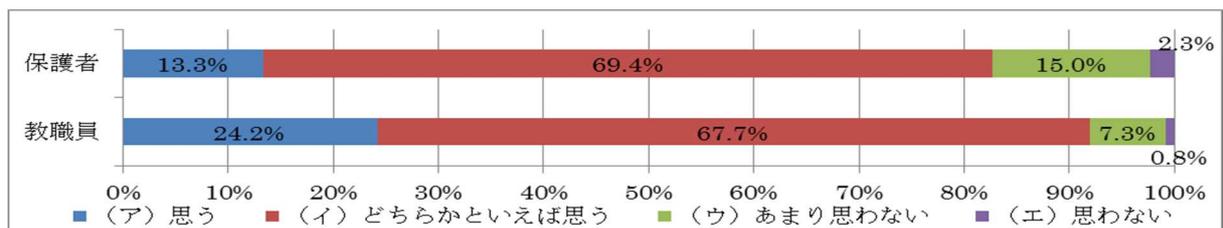
【設問 1－①】今年度の学校における食育の取組を通して児童の食に関する意識は高まりましたか。



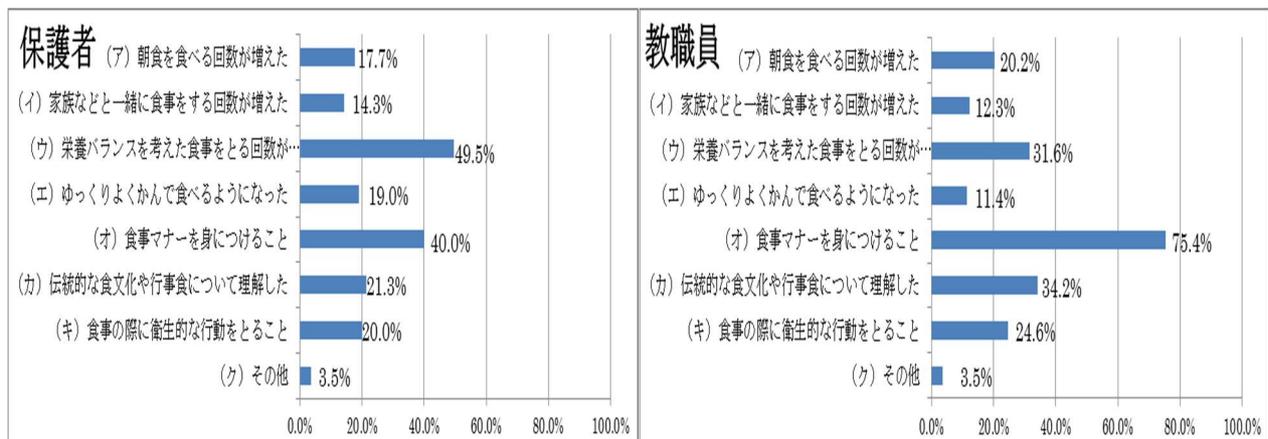
【設問 1－②】 1－①の (ア) (イ) と回答した人は、食に関する意識のうち、何が高まりましたか。



【設問 2－①】今年度の学校における食育の取組を通して児童の食習慣は変わりましたか。



【設問 2－②】 2－①で (ア) (イ) と回答した人は、食習慣のうち、何が変わりましたか。



8 成果と課題

<成果>

○児童の食育に関する意識に関すること

全体的には、全ての設問において、事前事後ともに、「思う」又は「どちらかといえば思う」（以下「望ましい回答」という。）と回答した児童の割合が9割を超えており、意識の高さが見られたものの、本事業実施前後での統計的な有意差は見られなかった。事前調査の時点で望ましい回答の割

合が高かったことは、これまでの食育への継続的な取組の成果であると認識している。

学年別では、朝食摂取の大切さについて、3、4、6年生の望ましい回答の割合が増加した。特に、4年生の「大切だと思う」と回答した児童の割合は、92.9%から96.0%に増加しており、栄養教諭が参画した社会科での地場農産物の学習を進める中で、食への関心が高まったことも要因の一つだと考えられる。

栄養バランスを考えた食事をとることの大切さ及び食事のマナーを身につけることの大切さについては、3、4、5、6年生の望ましい回答の割合が増加しており、取組の成果が見られる。

○朝食を欠食する児童の割合

全体的には、事前事後での統計的な有意差は見られなかったが、事前事後とも、朝食をほとんど毎日摂取していると回答した児童の割合が9割を超えている。

学年別では、3年生の「ほとんど毎日」と回答した児童の割合は、87.7%から92.7%に増加し、「ほとんどない」と回答した児童の割合は、2.4%から1.6%に減少した。また、6年生では、「ほとんど毎日」と回答した児童の割合は、86.2%から87.5%に増加し、「ほとんどない」と回答した児童の割合は、1.1%から0.6%に減少した。

○栄養バランスを考えた食事をとっている児童の割合

全体的には、事前事後での統計的な有意差は見られなかったが、学年別にみると、「ほとんど毎日」と回答した児童の割合が、1、2、5、6年において増加しており、「ほとんどない」と回答した児童の割合が、2年生を除く全ての学年で減少している。特に、5、6年生については栄養バランスを考えた食事をとることは大切だと思う児童の割合が増えており取組の成果が見られる。

○食事マナーに気を付けて食事をしている児童の割合（県独自の評価指標）

県の学校栄養士会が毎年行っている「食生活に関するアンケート」の「あなたは食器をもって給食を食べていますか。」の問いに対して、「①いつも食器をもって食べる」と回答した5年児童の割合は5月の61.5%から2月は66.9%に増加した。継続的な取組が更なる向上につながると考えられる。

○郷土料理を知っている児童の割合（県独自の評価指標）

県の学校栄養士会が毎年行っている「食生活に関するアンケート」の「あなたの住んでいる地域や山口県の郷土料理を知っていますか。」の問いに対して、「①知っている」と回答した5年児童の割合は5月の81.7%から2月は91.8%に増加しており取組の成果が見られる。

○教職員アンケートより

「児童の食に関する意識が高まったか」という設問では、望ましい回答をした教職員の割合が99.2%という結果で、児童の意識の高まりを感じた教員が多かったといえる。

望ましい回答のうち、特に高まったと思われるという意見の多い項目は（ア）朝食を食べること、（ウ）栄養バランスを考えた食事をとること、（オ）食事マナーを身につけること、（カ）伝統的な食文化や行事食を学ぶことについてであり、「朝食摂取率の向上・内容の充実」「食事マナーの定着」「地場産食材・郷土料理への理解」をねらった本事業の取組は有効であったと考える。

児童の食習慣の変化について望ましい回答をした教職員の割合は91.9%という結果であった。食習慣のうち改善されたと思われるという意見の多い項目は、（ウ）栄養バランスを考えた食事をとること、（オ）食事マナーを身につけること、（カ）伝統的な食文化や行事食を学ぶことについてであり、児童の意識の高まりとともに実践力も身に付いたことがうかがえる。

<課題>

○健康な食生活

今回の事業で得られたアンケート結果を分析すると低学年の食習慣が半年間で顕著に悪くなって

いることが見えてきた。小学校に入学して、保護者も児童も望ましい生活習慣を身に付けようと努力をするのが一般的であるが、低学年のうちには保護者の負担が大きいため、日がたつにつれて保護者の疲弊が児童の生活習慣の変化につながるケースも少なくない。小学3年生になると児童が自分の力でできることが増えるため、食に関する指導の効果も大きく出ており、高学年においても、ほぼ同様の結果が見られる。低学年のうちに望ましい食習慣について、発達段階に応じた内容のある程度定着させておけば、中学年以降の実践によい影響を与えるものと推察できる。今後は、低学年の児童や保護者に対する支援の仕方を考える必要がある。

○快適な食生活、継承する食文化

共食の回数は、朝食、夕食とも事業後の調査のほうが事業前の調査に比べて減少しており、児童が一人で食事をしている状況が広がることは、食事マナーの定着や食文化の継承が円滑に進むとは考えにくい。学年別にみても、どの学年においても減少傾向であり、「家族などと一緒に食事をとることを大切に思いますか。」の設問に対する回答にも同じ傾向がみられる。共食することに価値を見出すための取組や大人が子どもと共に食事をとることができる環境の整備などを考えていく必要がある。また、多様な価値が認められるようになった現代社会において、「正しい」の共通認識が曖昧になっている場面も多くある。子どもたちを取り巻く食に関わる環境を整備する意味では、家庭での共食だけでなく地域の方などとの共食も提案していく必要がある。学校が中心となって家庭や地域と連携した取組の一層の充実が必要である。

○教職員の意識の高まり

今回の事業を受けたモデル校では、教職員の食育に対する意識が高まり、学校の教育活動のあらゆる場面に食育の視点をもつようになった。この体制を維持するためには、次年度以降も「食に関する指導の全体計画」を見直しながら継続的・計画的に食育に取り組む必要がある。

9 情報発信と普及の計画

下松市での取組を報告書にまとめ、県内市町教育委員会、県内小・中学校、県立中等教育学校・中学校、県立特別支援学校、県内食育関連団体、他の都道府県教育委員会・指定都市等教育委員会へ配付し、取組の周知を図る。

山口県教育委員会が主催で行っている食に関する指導研修会ややまぐち総合教育支援センター主催の基本研修における食育に関する講座などで取組の成果等を紹介し、各学校における食育推進に活用する。また、来年度7月に開催する山口県栄養教諭・学校栄養職員夏期研修会において実践発表を予定している。